

竹内浩三全集—2

筑波 日記

小林 察 編



新評論

三全集—2

筑波 日記

小林 察 編

新評論

編者紹介

小林 察（こばやし・さとる）

1932年，三重県度会郡玉城町生まれ。宇治山田高校から東京大学文学部へ進学，同独逸文学科卒業。光文社出版局編集長を経て，現在，玉川大学文学部教授。最近の訳書に，ドイツの非行問題を告発した『かなしみのクリスチアーネ』，『アンディ』（共に読売新聞社刊）がある。1983年，同郷の親友西川勉の遺稿追悼文集『戦死やあわれ』（新評論）を編集。

現住所 東京都狛江市元和泉 2-27-12

竹内浩三全集 2 筑波日記

（検印廃止）

1984年 7月25日 初版第1刷発行

1984年 8月15日 初版第2刷発行

著 者 竹 内 浩 三

発 行 者 二 瓶 一 郎

発 行 所 株 式 新 評 論
会 社

〒160 東京都新宿区西早稲田3-16-28

電話 東京 (202)7391 番

振替 東京 6-113487 番

定価はカバーに表示してあります

印刷 新 栄 堂

落丁・乱丁はお取替えます

製本 河 上 製 本

©松島弘，小林察 1984

0095-950011-3177

Printed in Japan

編者まえがき

人を信じよう

人を愛しよう

そしていいことをうんとしよう

青空のように

五月のように

みんなが

みんなで

愉快に生きよう

(詩「五月のように」より)

昭和十六年五月十二日、満二十歳の誕生日に、こんなに明るく清らかな人間讃歌をうたってから一年の間に、竹内浩三は、嵐のような青春の感情を詩文の形で定着する術を身につけた。そして、翌十七年四月臨時徴兵検査を受け、同年九月卒業、十月入営が決定的となった時、彼は、かねてから構想していた文芸雑誌の創刊を実行に移した。在京中の宇治山田中学同級生である中井利亮、野村一雄、土屋陽一の三人を同人に誘い、「伊勢文学」と命名した。藁半紙わらはんしのような粗末な紙に自らがリ版を切って刷り上げたものだが、カットや製本には楽しい工夫が凝こらされている。現存する竹内浩三の詩と小説(第一巻所収)の

大半は、それに書きとめられたものである。中には、原稿もなく、鉄筆の先から生まれたものもあるようだ。十月一日、中部第三十八部隊（三重県久居町）へ入営の当日も、「ぼくは、今までみなさんにいろいろめいわくをおかけしました。みなさんは、ぼくに対してじつに親切でした。ただありがたく思っています。ありがとうございました。死ぬるまで、ひたぶる、たたかって、きます。」と、形どおりの中にも心のこもった挨拶を書き込んだ。そして、自室に籠って、膝を抱くように坐ったまま、チャイコフスキーの「悲愴」のレコードに聴き入っていた。姉が出発時間の到来を告げても、浩三は、「姉さん、後生だから終楽章の終わりまで聞かせてくれよ。」と言って、座を立たなかったという。

こうして、竹内浩三は、軍服姿に着替えて生家を後にした。それから二年半の後、故郷へ帰ってきたのは、「陸軍上等兵竹内浩三、昭和二十年四月九日、比島バギオ北方一〇五二高地にて戦死、当年二十五歳」と書かれた公報という一枚の紙であった。

その後、終戦直前の七月二十九日、伊勢市の生家も空襲で焼け、戦災を免れた松阪市在住の姉松島弘（こう）さんの手元にだけ、日大時代の学帽と手紙類が残された。その学帽は、浩三の墓が建てられた時、こうさんの手で「一片のみ骨さえなければおくつきに手ずれし学帽ふかくうずめぬ」という弔歌とともに、弟の身代わりとして葬られることになる。竹内浩三の遺稿は、没後三十九年を経た今日まで、姉の許で暖かく保存されてきた。小さな一個の風呂敷包みである。しかし、戦争が終わって生き残った遺族や友人に、これほど重い遺品を残していった者があるだろうか。つまり、戦場や銃後で斃れた幾百万の同胞に代わって、これほど後の世の心に響く真実の声を伝え残した者があるだろうか。戦争という暴力と、その暴力を行使するための軍隊という非人間的組織の実態を、一兵卒として、いや人間として、これほど臨場的に記録した者がいるだろうか。——とりわけ、「筑波日

記」と名付けられた二冊の小さな手帖ほどに……。

竹内浩三は、まだ初年兵の間は、郷里の部隊という親近性もあってか、詩や小説を書くゆとりがあった。ところが、一年間の歩兵訓練を終えたころ、急遽、茨城県筑波山麓に新しく編成された滑空部隊への転属を命じられた。滑空部隊というのは、爆撃機に曳行されたグライダーに搭乗し、敵地のただ中に着陸して、飛行場や港や橋など敵の施設を無傷のまま確保することを目的に編成された部隊であるが、落下傘部隊が重火器すら携行できないのに比べて、当時陸軍が開発を急いでいた大型グライダーは、小型戦車まで搭載できたという。すでに、一九四〇年五月ナチスの軍隊がベルギーのエバン・エマエル要塞攻撃にグライダーを用いて成功したという情報をキャッチした参謀本部は、西筑波飛行場での操縦者訓練を終え、グライダー搭乗兵員の聯隊を編成した。それが、竹内の配属された挺進第五聯隊、通称東部一一六部隊である。いわば、陸軍の『秘密兵器』であり、『虎の子部隊』の一つであった。その上、滑空部隊は夜明け前の奇襲に適するといわれ、夜間の演習が多く、ミ号剤と呼ばれる薬物（闇の中で眼が見えるのに有効といわれていたが、成分は不明）まで兵士に服用させていたらしい。

竹内浩三一等兵は、こうした特殊部隊の猛訓練の中で、日記を綴ったのである。しかも、二百余日にわたり、一日とて欠かした日はない。それが、いかに至難の業であるかは、兵役経験者なら、だれでも認めると思う。

この日記の第一印象について、ぼくは一つの文章をここに紹介しておきたい。

「みどり色のレザーの小さな手帖二冊、手垢で汚れ、綴糸もほどけ、だらしなくなっている。それへ、鉛筆とインキで、字体も文章も乱雑で、意気込んで書いたとも思われぬ。漢字も忘れっ放しの日記。昭和十九年一月一日より七月二十七日に至る。冬・春・夏の

季節を、ちっとも面白くなく、生甲斐もなく心臓を動かしていた記録。……光彩陸離だった彼が、なにを食べて、眠った、汗をかいた、寝ていたと云う記事の羅列を布く。この日記くらい、その日その日の食物を克明に記したものは見当たらない。軍隊では、食物が神様で、それが本当でも、普通の人間は恥しがって、思想がどうのこうのと書く。：

…」（中井利亮「筑波日記について」、伊勢文学第八号、昭和二十二年八月）

ここで中井が「思想」と言っているのは、もちろん戦中に猖獗した国粹思想であり、大東亜共栄圏思想等のことである。竹内は、終生そんな思想の怒号の中にありながら、ついに洗脳されることはなかった。そこで今日、竹内を反戦詩人と呼ぶ人もいるわけだが、彼は、およそ反戦をスローガンとするいかなる既成思想も持ち合わせていなかった。ただ、軍隊や戦争ほど彼の性に合わないものはなかった。生理的・感覚的に戦争がキライだったのである。

竹内浩三の遺稿のすべてに脈々と流れているのは、「人間への愛情」と「言葉への信頼」の二つである。そして、それはいかなる極限状況下に置かれても変わることがない。

「赤塚の駅前で、子供が部隊をよぎったと云って、中隊長は刀を抜いて、子供を追っかけた。本気でやっているのである。その子供の一生のうちで、これが一番おそろしかったことになるであらうと思った。」（五月二十三日）

「便所ノ中デ、コッソリトコノ手帖ヲヒライテ、ベツニ読ムデモナク、友ダチニ会ッタヨウニ、ナグサメテイル。」（三月十八日）

ぼくは、光彩陸離だった生身の竹内を知らない。しかし、日記の随所でこのような言葉に出会くと、竹内浩三の肉声が聞こえてくるような気がする。

「竹内浩三の天才を信ずるものにとって、その戦死は、何ものにも代えがたく悲しい。」

私たちは、ほんものの人間を失ったので、彼ほど人間として物を言う人間はなかった。」

ぼくは、この中井利亮の言葉にまったく同感である。しかし、同時に、竹内浩三が、二十三歳という短い生涯の晩年の数年間に、その人間的眞実を不屈の決意によって書き遺し、それが四十年を経た今日これだけ我々の手に残されていたことを心から喜びたい。このような奇蹟を現実としたのは、まず何よりも竹内自身の苦心である。「筑波日記Ⅰ」は、竹内が最も愛した詩人宮沢賢治の作品集（十字屋書店版全集の一巻と推定する。）をくり抜き、その中に埋めこまれて姉の許に送られてきた。「筑波日記Ⅱ」は、今もってどのような径路を経たか分からないが、戦後、いったん中井利亮の手に渡りながらすぐ行方不明となつて、その発見は絶望視されていた。それが、全集編纂の途中に偶然中井家の土蔵から発見されたのは、幸運というほかない。

そして、二〇八頁に掲載した竹内の中井宛手紙から推定できることは、「筑波日記Ⅲ」以下の存在である。それは、あるいは竹内の背裏に入れられたままフィリピンで戦場で消えたかもしれぬ。竹内の最後の「ねがい」どおりに……

ぼくがみて、ぼくの手で

戦争をかきたい

そのためなら、銃身の重みが、ケイ骨をくだくまで歩みもしようし、死ぬることすら
さえ、いといはせぬ。（六月八日）

一九八四年六月八日

小林 察

謝 辞

本全集の編纂に当たっては、竹内浩三の郷里三重県に在住の方々、とくに姉松島こうさん、親友中井利亮氏はじめ多くの故人関係者の篤実な御協力をいただいた。

また、故人の恩師井上義夫氏はじめ阪本楠彦東大名誉教授、三嶋与四治松竹映像常務取締役等、多くの在京関係者からは、貴重な御教示を受けた。さらに、故人を世に紹介された先達とも言うべき足立巻一氏、桑島玄二氏の御著書等も参考にさせていただいた。そして、しばしば深夜まで作業をともにした新評論編集部の中村良雄、池谷郁代、装丁の薬師神親彦氏等多くの方々の御尽力によって、二巻が同時に刊行の運びとなった。ここに、諸氏の御芳名を記して、衷心より感謝の意を表したい。最後に、編者に竹内浩三の存在を教えて自ら取材の途中不慮の死をとげたNHKチーフ・ディレクター西川勉の霊にこの全集を捧げる。

(小林 察)

もくじ

編者まえがき

小林 察

1

筑波日記

一 冬から春へ

11

(一九四四年一月一日—四月二八日)

筑波日記

二 みどりの季節

113

(一九四四年四月二九日—七月二七日)

手紙

一 学生時代

165

(一九四〇年六月四日—一九四二年七月三日)

手紙

二 入隊以後

197

(一九四三年四月七日—一九四四年一〇月一五日)

竹内浩三の思い出

211

中学生の筆禍—竹内のこと

阪本楠彦

追憶 野村一雄

『愚の旗』あとがき

中井利亮

年譜・戦局と竹内浩三

232

装 幀・薬師神親彦
カ ッ ト・竹内浩三

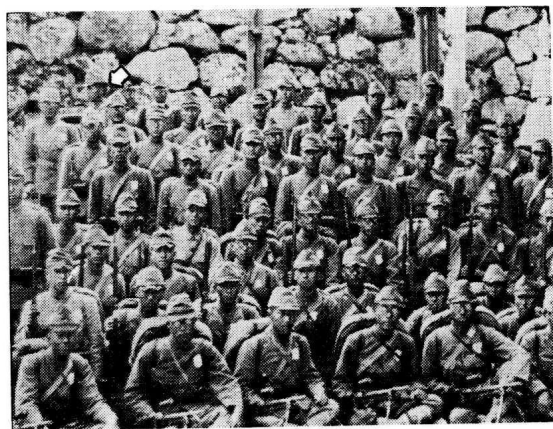
竹内浩三全集
2

筑
波
日
記

筑波日記 一

冬から春へ

(一九四四年一月一日—四月二八日)



コノ マズシイ記録ヲ
ワガ ヤサシキ姉ニ
オクル

K O Z O

コノ日記ハ、(昭和)十九年ノ元旦カラハジマル。シカシナガラ、ボクガコノ筑波ヘキタノハ、十八年ノ九月二十日デアッタカラ、約三月ノ記録ガスケテイルワケデアアル。コノ三月ガスケテイルト云ウコトハ、ドウモ映画ヲ途中カラ見ルヨウデ、タヨリナイ気モスル。ト云ツテ、今サラ、ソノ日々ノコトヲカクコトモデキナイ。ザットカク。

九月十九日、夕方土浦ハ雨デアッタ。北條ノ伊勢屋旅館ヘトマッタ。トオイトコロヘキタト思ッタ。

二十日ノ朝コノ部隊ヘキタ。兵舎ガ建ッテイルダケデ、ナンニモナカッタ。毎日、一二七(部隊)ノ飛行キガトンデイタ。毎日、イロンナ設備ガ出来テ行ッタ。

三中隊ヘカワッタケレドモ、一週間デ二中隊ヘモドッタ。毎日、演習デアッタ。一月ホドタツト、重キカン銃ヘマワッタ。分解ハン送デ閉口シタ。

西風ガ吹キハジメテ、冬デアッタ。

敏之助応召ノ電報ガキタ。三泊モラッテ帰ッタ。十一月二十八日。土屋、中井、野村ガ、ソノトキ明日ノ入隊ヲヒカエテイタ。マッタク、イイ具合ニ会エタ。野村ヲ送ッタ。東京ノ大岩照世ノ家ニヨッタ。久シブリノ東京デアッタ。

筑波山腹デ二泊ノ天幕露営ガアッタ。ボクハ炊事ニマワッタ。

水戸ヘ、三日ツヅケテ、射撃ニ行ッタ。夜オソク帰ッテ、朝二時ニオキテ、又出カケルノデアッタ。二時間ホドシカネムレナイノデアッタ。下旬ニナルト、富士ノ滝ケ原ヘ廠営ニデカケタ。学校ヘ行ッテイルコロ、二度キタコトノアルトコロデアアル。一週間富士山ヲミテクラシタ。十八年ガ、オワッタ。

一月一日

拝賀式デ外出ガヒルカラニナッタ。大谷ト亀山ト三人デ吉沼へ行ッタ。十一屋デテンブラトスキヤキヲ喰ッタ。タカイノデ、ビツクリシタ。

一月二日

谷田ト二人デ外出シタ。チヨウド営門前ニバスガイタノデ、乗ッタラスグ出タ。吉沼デ、時計ノガラスヲ入レタ。十一屋デシバラク火ニアタツテ、宗道マデアルイタ。ウドンヲ喰ッタ。牛肉ヲ二円七十五錢買ツテ、山中サンへ行ッタ。イモト、モチヲゴチソウシテクレタ。牛肉ヲタイテモラッタ。

一四・四〇ノバスデ吉沼ヘカエッタ。十一屋デウドントメシヲ喰ッタ。夜、エンゲイ会ガアッタ。

一月三日

谷田ト亀山ト三人デ外出シタ。途中デバスニノッタ。下妻カラ汽車デ宗道ヘマワッテ二日ニカエッタヨウニシテカエッタ。

夜マタエンゲイ会ガアッタ。